

建材マンズリー

Kenzai Monthly

特集
創刊50年記念スペシャル対談

藤森照信

さん
建築家・建築史家

KIKI

さん
モデル・女優

創刊50年に寄せて

ここでちょっと一息 **Coffee Break**

これからの50年に向けた政策と住宅産業

付加価値創造に挑戦! **注目企業を訪ねる**

ブナコ漆器製造 株式会社

今月のニュース

建材マンズリー資料室

建築家・建築史家

藤森照信さん

KIKIさん

モデル・女優

自然素材を駆使した作品で知られる建築家の藤森照信さん。
街の建築ウォッチングが大好きというモデルのKIKIさん。
大正期に建てられた歴史的建築・旧安田楠雄邸で、
お二人に建築の面白さ、愉しみ方を語っていただきました。

Photo: TORA noie, Hatt&Make/Runi Hirose

撮影協力: 旧安田楠雄邸

五感を 刺激する、 自然素材の 建築

建築は面白い、建築は懐かしい

藤森 最近僕がびつくりしたのは、きれいになった東京駅の建物にもすごい数の人が見学に来て、カメラを向けていたことです。歴史的な建築に人びとがこれほど興味を持つなんて、今までなかったと思う。周りの現代的なビルが東京駅の引き立て役に回っていて、なんだか嬉しかったですね。

KIKI 誕生から100年を迎える東京駅駅舎が保存復元されて、すごくよかったです。これまでも何度も解体の危機に直面していましたが、あんな風になるとは思わなかったです。本当に素敵な駅に蘇りました。藤森 東京駅は石とレンガですが、あれがコンクリート

造りか何かが変わっていたら、本当にあそこは嫌な場所になっていましたね。昔の建物には、「懐かしさ」という独特の時間の力があります。人びとの記憶の積み重ねから生まれる懐かしさは、人間にしかない人間らしい感情で、サルや犬にはありません(笑)。時間の経過を好ましいと思う力で、喜怒哀楽とはまた違う感情なんです。KIKI 私もブラブラと建築を見ながらよく歩くんですが、実際に昔見たわけでもなく、懐かしいなど感じることがあります。藤森 昔見たことのないものでも、懐かしいと思うことはありますよ。僕なんて、イタリアの田舎を歩いている時に懐かしくなって、変だなーって思ったりします。

KIKI それが居心地の良さにつながるんでしょうね。私も海外で懐かしいと感じること、よくあります。ほんと不思議です。新しく作られる建築に、この懐かしさを感じられたら素晴らしいですね。ここでは素材が大きな役割を持っているのかな、と思います。

「視覚を通して、建築の触覚を味わう」

KIKI 先生は自然素材を主に使って設計をされているのですか？



藤森 基本的にはコンクリートや鉄も使いますが、少くとも人が触ったり目に見えるところは、自然素材が多いですね。

KIKI 私は浜松市にある秋野不矩美術館が特に好きで、あそこは靴を脱いで裸足で上がりますね。木や大理石の床に直に触れるのは、自然素材ならではの楽しみだと思います。

藤森 あまり意識はしていないですが、建築はね、必ず足が触れているんです。昔は座っていたから足だけでなく膝やお尻も触れていた。手も触っている。日本建築は、伝統的に常に建築素材に直接触っていたんです。このことはあまり重視されていないけれど、建築で一番大事なところだと思います。

KIKI 木や畳は素材に触れるほうが素材を感じます。藤森 そうです、それがすごく大事なことです。日本の場合、柱や畳など、ほとんど植物で作りましたから、建築が触覚をすごく刺激するんです。触覚って変なものですね、本当は触らないとわからないはずでしょ。だけど

触らなくても見ただけで、その材が柔らかいか硬いかわかる。いろいろ触っている経験があるから、目で見ただけでちゃんと触覚が働く。

KIKI 確かに、ガラスは触ったら冷たいだろうとか、見ただけで感じられますね。

藤森 視覚というのは、本当はその背後に触覚を控えて見ているんです。だから建築を見ることは、視覚を通して触覚を味わっているようなものですね。

KIKI そういうことは経験して知っていくものですね。今の人たちが触れるものは変わってきていますか？

藤森 今はもうほとんど工業製品ですから、その感覚は相当衰えてきているんじゃないかという気がします。

KIKI インパクトは、デザインで見せていますが。藤森 そうですね。だけど触感とか視覚に対する刺激は少ないですよ。

■ 旧安田楠雄邸 1919(大正8)年に建設された近代和風建築。普請道楽といわれた実業家・藤田好三郎氏が建設。在来建築技術と大正期の工業技術力が結集、優れた意匠が発揮され、1998年に東京都の文化財指定を受ける。関東大震災後に建物を譲り受けた安田家が長年住み続けてきたが、安田善次郎氏の孫にあたる安田楠雄氏の死去の後、相続した家族から「愛着のある建物を保存し、多くの人に親んでもらいたい」という意思が示され、それを受けた「たてもの応援団」の尽力により、公益財団法人日本ナショナルトラストに寄贈された。1999年から本格的な復元修理事業を開始し、2007年から一般公開を開始した。

一般公開日/毎週水・土曜日 10:30~16:00(入館は15:00まで) 住所/〒113-0022 東京都文京区千駄木5-20-18 TEL・FAX/03-3822-2699(公開日のみ)



だいたいツルツルでピカピカ。
KIKI 最近の建築も、そういうものが多い気がしますが。

藤森 多いうて言うか、ほとんどそうです。僕の友達はそのなのばかり作ってる(笑)。

KIKI 私の場合、心に残ったり心地いいと思う建築は、結局古いものの方が多く、新しく作られたものあまり魅力を感じないんです。

藤森 それね、今の現代建築の一番の問題なんです。現代建築の先端でやっている僕の友人たちが、その問題を切実に感じている。今まで鉄とかコンクリートとかステンレスなど工業製品で作ってきたでしょう。どうもそれが人間にとって、なんかしつかり心に沁みていかないんじゃないか、という気持ちを皆さん持っているんです。自覚はしているけれど、でもどうしていいかわからない。解決するための答えは、なかなか簡単には見つからないんですね。

KIKI 自然素材を使うなど、先生はその方法を早くから気付かれて、建築で実現されていますね。

藤森 僕が設計を始めたのは45歳ですから、同世代の先



きき 1978年、東京生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。大学在学中からモデル活動を開始。2004年には、「ヴィジュアル」で女優としての活動をスタートする。雑誌「オズマガジン」(スターツ出版)の表紙と巻頭モデルを2009年より務める。現在、雑誌やTVCMなどの広告、連載などの執筆、ラジオのパーソナリティやアートイベントの審査員など多方面で活動中。現在、「NHK 高校講座芸術-美術」の司会、日テレ系「ゆっくり私時間」に出演中。近著に『山スタイル手帖』(講談社)、『美しい教会を旅して』(マーブルトン)、『山・音・色』(山と溪谷社)など。

端系の人たちがやっている現代建築のやり方は絶対にやるまいと思ったんです。だって僕が作ったら笑われるよ、下手くそって(笑)。だから、自分の好きなことだけやるうと思って、それは今思えば良かったです。

茶室は身近で、服に一番近い

藤森 人間の五感に優しいとか、五感を刺激するといったことを建築でやろうとしても、なかなか簡単にはいかない。でも日本の場合、自然素材の土と木と紙と草で建築をやってきた伝統があります。例えば、洗いざらしの布や古びたものを味わうという感覚は、利休以来ずっと受け継がれています。

KIKI 私は茶の湯の世界に興味があるのですが、最近、お茶室の魅力に気づくようになりました。

藤森 茶室というのは、世界で最も建築が身近なんです。僕が自分で経験したことなんです。茶室を初めて作って引き渡すとき、渡したくないと思ったんです(笑)。

KIKI どうしてですか？

藤森 直接的に手を掛けて作るので、自分の子供みたいな気がして渡したくなかった。で、渡した後、これでは

街の中の古い建築に、心地よさを感じます。 KIKIさん



懐かしさは、建築の持つ力のひとつですね。 藤森照信さん

ならじと思つて「高過庵」という自分の茶室を作ったんです。茶室は本当に不思議なもので、身近で、そして一番服に近いものだと思うんです。

KIKI 服ですか？ 常に体に触れているものですね。

藤森 着ているもの。だから一番小さい。利休の茶室は畳2枚です。それで思ったんですが、フランスの貴婦人たちが好んだロココというスタイルは、外観はつまらないが、インテリアだけはとてもいい。茶室もそれと同じで、あまり外観のことは言わない。それよりも中が命なんです。茶室もロココも建築だけと着るものみたいで、なんか服に近いんです。これはちょっとと面白い発見なんです。着るものだから、自然素材の良さが出てくる。

KIKI 絹や木綿のように肌触りのよいものを求めているんですね。

木の家を自由に作ってよい国は少ない

藤森 僕はここ10年ぐらい、木の建築を台湾やオーストラリア、



ふじもりてのぶ 1946年、長野県生まれ。工学院大学教授、東大名誉教授。本業は明治以後の建築史研究だが、1991年、郷里の長野県茅野市に「神長官守矢史料館」を作り、45歳にして建築家デビュー。鉄筋コンクリートの構造体を地元の石や土や手割りの板ですっぽり包む建物に、「見たこともないのに懐かしい」との評価を得る。その後、壁から屋根にタンポポを植えた「タンポポハウス」、ニラの「ニラハウス」(日本芸術大賞受賞)、「浜松市秋野不矩美術館」、「熊本県立農業大学校学生寮」(日本建築学会賞作品賞受賞)、茶室「一夜亭」などの作品を発表。建築に関する著書多数。

英国やドイツなどで作っています。ところが国や場所によって木造建築の前提条件が全然違うんです。種類も使い方も、使っている材料も違う。ほとんどの国で森林資源の問題から木は自由に使えない。また使えたとしても、柱や壁などには使わない。木を表に見せて使う国は、実は世界では日本だけと言ってもいいんです。

KIKI 先生が海外で作られるものに対して、みなさんほどのような反応をされますか？

藤森 僕は柱が好きだから部屋の中にドーンと立てるわけですが、外国ではそんなの見たことないって驚きます。KIKI 同じ木でも扱い方が日本と全然違いますね。

藤森 建築材を語る時、石についてはイタリアを、木については日本の木造を見ればだいたいわかる、と言われています。日本は森林資源が豊かで自由に使うことができるので、木の利用という点では非常に有利なわけです。ただ、木材自身は強度の点や個性がばらばらな点など、問題もあります。でも最先端の科学技術の力を借りれば、木材はもっと使いやすくなります。50年後の日本の家は、肌で触れるところでは、木など自然のものが相当復活していると思う。科学技術と自然をどのようにコンビネーションしていくかが、今われわれに与えられている課題だと思います。

おかげ様で「建材マンスリー」はこの8月で、創刊50年の節目を迎えました。「業界の動向・将来性を伝え、業界を盛り上げていく雑誌を」という理念のもと、皆様に情報をお届けしてきた弊誌に対し、建材・木材業界を主導する方々から、お祝いのメッセージをいただきました。

継続は力なり



日本合板商業組合
理事長
足立建一郎様

「建材マンスリー」が創刊50年をお迎えになりましたこと、お慶び申し上げます。

一言で50年と言いますが、月刊誌でいうと600号程の発行ですから、本誌に携わった皆様のご苦勞に敬意を表したいと思います。

住友林業さんは、木材・建設資材総合商社という位置づけと共に、日本を代表する在来軸組み工法の元請企業として、住宅産業のプロ集団であります。

日本合板商業組合は住宅資材流通企業が主な会員として構成されており、その前身は1955年（昭和30年）に発足した日本ベニヤ板商業連合会です。当時の会員は約200社あり、現在では約1000社となり、国内最大規模の合板建材流通組織となりました。

組合では業界の声をまとめ、関係官庁に意見書を提出するなど、流通業界の活性化のため、更なる会勢強化に取り組んでおります。そこで、住友林業さんの住宅産業のプロとしての情報を、「建材マンスリー」をはじめ、いろいろな方法で提供いただけることを大いに期待しております。

「継続は力なり」と申します。創刊100年に向かって、新たな気持ちで更にパワーアップした「建材マンスリー」を発刊し続けていただることを願っています。

建材・木材の更なる情報を



日本繊維板工業会
会長
澤木良次様

「建材マンスリー」の記念すべき創刊50年おめでとうございます。

日本繊維板工業会は、2007年（平成19年）に50周年を迎え、100周年に向かって歩みを進めています。この半世紀を振り返りますと、建材・木材業界は高度成長期を支え、内需拡大の柱として貢献してきました。貴誌が創刊された1964年（昭和39年）は、おりしも林産物の貿易自由化が実施され、他産業に先駆けて国際化がスタートした年です。

当会員も操業当初はインシュレーションボードやパーティクルボードに、丸太チップや製材・合板工場から出る端材を原料としていましたが、今は建築解体材が8割を占め、木材のカスケード利用やリサイクル材活用を中心を担う業界として、環境に大きく貢献しています。

また、MDFは国内外に生産拠点を持つ会員が、国内ユーザーの高度な要求に応えるべく、日々技術開発に努めています。今後も建築や家具、畳だけでなく、新規用途を開拓しながら持続性社会に貢献してまいりたいと思います。

「建材マンスリー」には引き続き新しい情報をご提供していただき、建材・木材業界及び当工業会の発展にご協力いただくことを、切に願っております。

業界の明日を照らす



株式会社日刊木材新聞社
代表取締役社長
岡田直次様

「建材マンスリー」が500号を迎えたとき、当社発行の「木材建材ウイクリー」コラム（潮流）で、「時代を予見した「建材マンスリー」と題して、この雑誌が如何に先見性に満ちた雑誌だったかを書いたことがある。

建材の将来を考える上で、難燃・耐震・耐久の要件を備えていること、建物の高層化に伴う軽量建材の普及、建築の合理化に伴う組み立て工法や乾式工法の普及、量産住宅の開発、そして高度な木材資源の集約利用などが課題であるという主旨の論文が掲載されていた。当時の安宅産業木材部課長の河島藤太郎氏執筆のもので、些か肩を張った論文だが、的を射た内容と今でも思っている。

住宅や建物に求められる要件は、安全で安心して暮らせる空間であることが必須だ。それを様々な建材が持つ機能で、人々の欲求を満たすものであると考える。建材業界は、少子高齢化による需要内容の変化、6000万戸にも及ぶ総住宅戸数の今後の改修や中古住宅流通に関わる様々な課題を、今後クリアしていかなければならなくなるだろう。そうした商品開発と共に、社会の構造変化に対応する役割がある。

「建材マンスリー」は必ずやそうした変化を先取りし、核心に切り込むテーマで誌面を賑わしてくれと思う。もちろん、当社記者も負けてはいない。互いに切磋琢磨して、業界の明日を照らしたい。



藤井繁子

『月刊 HOUSING』編集長、リクルート住まい研究所主任研究員などを経てフリーの住生活ジャーナリストに。自治体や市民団体と街づくりに関わりながら、国内外で取材・コンサルティング活動などを行なっている。

これからの50年に向けた政策と住宅産業

創刊50年の「建材マンスリー」、世代を超えて“継続”された先人への敬意と共に、この場に参加できたことを感謝しています。これを受け、この先50年、住宅・建材産業がどのような方向に進んでゆくのかを考えてみたいと思います。

日本の国土計画も50年

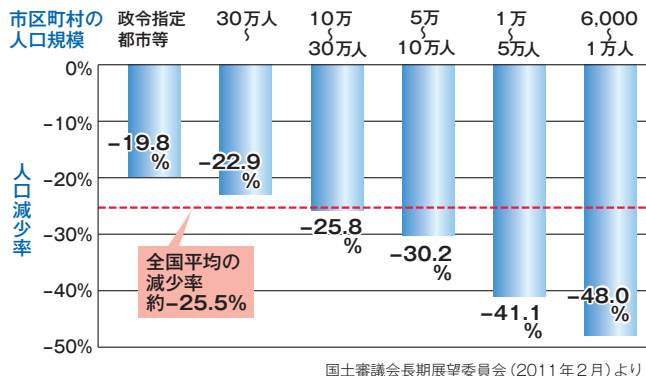
1962年に決定された最初の全国総合開発計画は、所得倍増計画と共に高度経済成長の波に乗って始まり、その後、概ね10年毎にそのテーマは“大規模開発プロジェクト構想→定住構想→交流ネットワーク構想”と変遷しながらも、第四次全国総合開発計画の2000年まで国際化を含め成長拡大を描いてきました。しかし、人口減少・高齢化時代を迎えた2008年、経済情勢の大転換や価値観の変化などを背景に国土形成計画と改め、新たに広域ブロック制や災害に強い国土の形成などが目標に掲げられるようになりました。

国土強靱化(ナショナル・レジリエンス)を掲げる政府

今後の国土計画について、野党自民党時代から進められてきた国土強靱化計画が現内閣において「防災・減災に資する国土強靱化基本法案」(国会継続審査)として重要な指針に位置付けられました。東京オリンピック建設ラッシュによる築50年を経たインフラ改修、南海トラフ巨大地震への備えも緊急課題です。それにはインフラ公共事業のゼネコンだけでなく住宅の耐震化や密集市街地対策、エネルギー政策など住宅産業の役割も大きく、国土強靱化の一翼を担うことになります。

一方、2050年に日本の人口は9708万人と、2005年比で約25.5%減少する推計。首都圏・名古屋圏の一部以外は減少し、現人口の半分に減る地点(1km²毎)が全国で6割以上。グラフのように、より規模が小さな市区町村において、減少率も高くなる傾向です。東京一極集中のリスクを減らす必要と共に、街づくりでは高齢社会のコミュニティや福祉サービスといったソフトを維持する為の“コンパクトシティ化”も強靱化施策の一つになります。

【2050年の2005年比人口増減状況】
市区町村の人口規模別の人口減少率



ハードと共にソフトの開発が街づくりの肝に

既に現在の街づくりも、次代を見据えたソフト開発を重視したものが多くなっています。「コドモ里山ラボ 東京森都心」(積水ハウス他4社)では4棟の小規模開発でも、住戸内空間とクルドサック(自動車の通り抜けを排除するために設ける方向転換が可能な袋小路)を囲んだ住戸配置によって、子供が安全で安心な環境を提供しコミュニティを醸成するもの。

「Fujisawa サステナブル・スマートタウン」(藤沢市とパナソニック他11社)は1000世帯の大規模開発で、エネルギー・セキュリティ・モビリティ・ヘルスケアなどの分野において独自のインフラ構築だけでなく、スマート・コミュニティライフを提供する為のタウンマネジメント運営会社「Fujisawa SST マネジメント」を設立。住民の交流を最新のIT技術も活用してサポートする予定で、新しい住ソフトが形になりそうです。

また私が期待しているのは、政府が選定する「環境未来都市」である宮城県東松島市と住友林業が「復興まちづくりにおける連携と協力に関する協定」を締結した取組み。木の持つ多様な力を、産業復興から教育、健康・医療分野に至って街全体へ活用するプロジェクトが進んでいるようです。理想を掲げた「木化都市」の50年後が楽しみです。



キッズデザイン体験施設にもなっている「コドモ里山ラボ 東京森都心」



2014年街びらきを迎える「Fujisawa サステナブル・スマートタウン」



復興まちづくりに関する協定を結んだ、東松島市(阿部市長、右)と住友林業(市川社長)

付加価値創造に挑戦!

注目企業

を訪ねる

地場のブナ材を有効活用し
世界ブランドを生み出す

ブナコ漆器製造 株式会社



代表取締役社長

倉田昌直 さん

ブナコ漆器製造 株式会社

- 本社 青森県弘前市大字豊原1-5-4
- 創業 1963年
- 資本金 2100万円
- 売上高 1億1000万円(2012年10月期)
- 従業員 23名
- 事業内容 天然木材による雑貨、インテリアの企画製造販売

⊕ テープ状のブナ材を
バームクーヘンのように巻き上げる

パリで毎年開催されるインテリアとデザインの見本市「メゾン・エ・オブジェ」で高い評価を集め、日本はもちろんパリで高級インテリアを取り扱うコンセプティショップでも販売されているブナコ漆器製造株式会社の商品。椀や皿、ボウルなどのテーブルウェアをはじめ、天然のブナ材を独特の技術で加工して生み出される和とモダンが融合したブナコブランドの誕生の地は、青森県の弘前市だ。

「ブナコ」とは、樹木の「ブナ」と、巻くという意味の「コイル」、そして大切なも

のや愛らしいものに対して末尾に「〜」と付ける、津軽弁を併せた名前です。青森県は、ブナの蓄積量が日本一と言われます。しかし、ブナは水分を多く含む性質があり、住宅建材などには適さない樹木です。私の子どもの頃は、薪として燃やすか、リンゴ用の木箱にするしか使い道がありませんでした。そこで、地元の大切な資源であるブナを有効活用するため、青森県工業試験場で研究が行われ、1956年にブナコの製造技術が誕生。1963年にこの技術を買取り、地場産業として育て続けてきたのが、ブナコ漆器製造株式会社です」

⊕ ブナコの製造技術は、非常に独特だ。まず、ブナの木を大根のかつらむきのように



職人の繊細な手作業がクリエイトするテープ状のブナ材。エロジカルな商品を生み出す



老舗和菓子屋「虎屋」が六本木ヒルズに出店したトラヤカフェでも採用されたブナコのランプ

⊕ できない、とは言わない
できるかもしれないから始める

「1980年に創業者である父の跡を継ぎ、ブナコの販路を東京へと拡大。大手百貨店との取り引きで売上は伸びていき、90年代に入りパブルが崩壊しても、ずっと右肩上がりでした。おそらく、それまでは商品自体の質の高さで持っていたのでしょ。しかし、景気の衰退には逆らえず、さすがに97年頃から少しずつ売上が低迷していききました。以降、形や色を工夫してあらゆるテーブルウェアの新商品を出しましたが、まったく売れなかった。消費のトレンドの変化に気付けなくなっていたんです」

「何をやってももう駄目だ。ブナコは限界かもしれない。あるとき倉田社長は、弟に弱音を吐いた。すると、こんな言葉が返ってきたという。「その限界って、兄貴の心の中にあるんじゃないの?」



グッドデザイン賞など数々の賞に輝くブナコの商品

「なぜ照明の傘なんか作るんだ」と、そばを向かれてしまいました。職人とは、伝

⊕ テーブルウェア一筋だったブナコが、照明器具という新しいマーケットに挑戦する。これはたやすいことではなく、職人たちの反発もあったという。

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

薄くむいて、厚さ1mmの薄い板にする。これを細いテープ状に裁断したのち、コイルのように何重にも巻き上げていく。立方体などをくりぬく一般的な木工製品と比べると、木を無駄にすることなく使い、非常にエコロジカルだ。

「バームクーヘンのようになった平面の巻き板は、湯飲み茶わんの丸みを利用して、手作業で成形していきます。中心から外側に向かって、湯飲み茶わんを滑らせて少しずつ押し出していくことで、徐々に傾斜が生まれて立体になっていくのです。職人の絶妙な力加減で、実に様々なフォルムとデザインを生み出すことが可能で、挽き物など従来の木工技術とはまったく異なります」

「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」



テーブルウェアにライト、スピーカー、イスなどブナコの製造技術には無限の可能性がある



「弟は、そんなこと言ったか?とまったく覚えていない様子です(笑)。でも、私は確かにそう言われて、勝手に限界を作った。自分でめようとしていたのだ。そして、その前の年に、友人に頼まれて照明器具のシェードを作ったことを思い出しました。ブナコの技術で作る、滑らかな曲線と温かな風合いの照明器具。これで、起死回生を図れるかもしれない。もう限界だ」と心が折れていた時には、考えもしなかったことでした。人の気持ちというのは不思議なものです」

旧家再生を目指す 「百年のいえ倶楽部」設立

住友林業ホームテック



入を検討している人も、対象として広げる。

会員特典としては、まず新規入会時に、リフォームエンジニアによる劣化状態の無料建物診断を実施する。また、旧家リフォームや補修に関する会員専用の相談窓口を新設するほか、メールマガジンや季刊誌によって、旧家の匠や技術の紹介、建物の維持管理の情報などを定期的に発信する。

リフォーム専門会社の住友林業ホームテックは、1950年以前に建築された建物を「旧家」と位置づけ、これらを後世に残し繋ぐことを目的とした、会員制倶楽部「百年のいえ倶楽部」（入会金・年会費無料）をこのたび設立した。

同社では、旧家の趣を残しながらも、耐震性能や断熱性能などを向上させるリフォーム技術の研究・開発に取り組んでいる。今回の「百年のいえ倶楽部」の設立を契機に、歴史を重ねた旧家を現代の生活スタイルに合わせた住まいへと蘇らせる、温故知新のリフォームをより広く紹介したいとしている。

会員は、同社で旧家をリフォームしたオーナーだけでなく、現在旧家などに住んでいる人や旧家購

■「百年のいえ倶楽部」主な入会特典

特典	
1	入会時の無料建物診断
2	旧家に住み替え時の仲介手数料10%割引
3	リフォーム工事代金3%の特別永久割引
4	旧家リフォームの相談窓口を設置
5	旧家のための長期有償メンテナンス制度
6	歴史的建築物などを見学する定期的な交流会やセミナーの開催
7	役立つ情報のメールマガジンの配信
8	定期刊行誌「リフォレスト」の送付

さらに、会員が同社で行うリフォームは、今後すべて工事費用を割引く特典を設け、リフォーム計画をサポートする。またリフォーム後には、新たに構築した旧家専用の「長期有償メンテナンス制度」で適切な維持管理や改修提案を行い、旧家を次世代へと繋ぐ役割を果たしていく。

創刊号に立ち返って

住友林業株式会社
常務執行役員
木材建材事業本部長
梅木 孝範



「一層の前進の指標としてここに『建材マンスリー』を創刊する」創刊に当たり、安宅産業(株)木材及建材本部長の市川政夫氏はこう書き記しています。1964年当時、大量生産・大量消費社会の到来は技術革新による流通短絡化の潮流を生み、「商社無用論」が唱えられる中、「流通事業者とはどうあるべきか、われわれは何をすべきか」と自らに問いかけています。そして「新しい時代に即した流通事業者としての新しい役割を探索し、自分自身が進んで流通革命の担い手として活躍する以外に途はない」と結んでいます。つまり、変化のリスクを恐れず、変化にチャンスを見出し挑戦し続けるといふ決意が創刊の精神であると考えられます。

創刊から50年が経過し、発行人は安宅産業、安宅建材、住友林業へと受け継がれて参りましたが、真に受け継がれるべきものは創刊の精神であると思います。私どもがお客様のニーズを具体化する努力を継続し、その情報を発信することが「建材マンスリー」の使命であります。「建材マンスリー」が50年の長きにわたって継続出来ましたのも、ひとえにご愛読いただいている皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。これからの50年も皆様と共に歩んで参りたいと思いますので、引き続き「建材マンスリー」をご愛顧賜りますようお願い申し上げます。

編集室より

広告掲載・誌面に対するご意見、ご感想は
建材マンスリー編集室専用アドレスまでお寄せください。

✉ kenzai-monthly@sfc.co.jp

住友林業株式会社 木材建材事業本部 事業開発部 (三枝・齋藤)

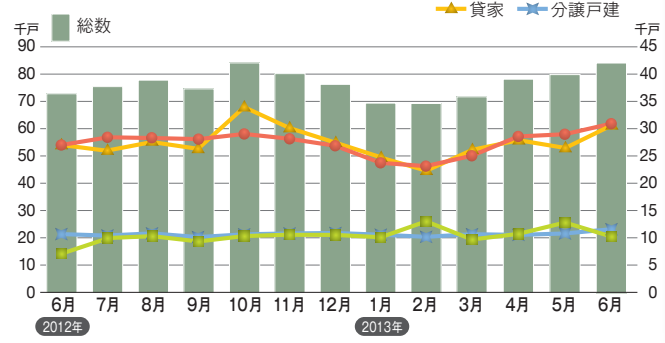
編集後記

編集に携わり1年経ちました。試行錯誤しながらもやってこられたのは関係者を始め、多くの方々に助けていただいたおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。創刊50年を迎えるに当たり、この媒体の重要性を改めて感じるようになりました。いつかは自分がしてきたことも歴史の1ページとなっていくのかと考える半面、歴史に残るのにふさわしい仕事をしなければという思いが同時に湧き、心の糸がピンと張っていくのを感じました。先人達がつなげてきた思いを受け、さらに新たな色を付け加え100年に向け「歴史」を作っていきたいと思っています。(編集員SS)

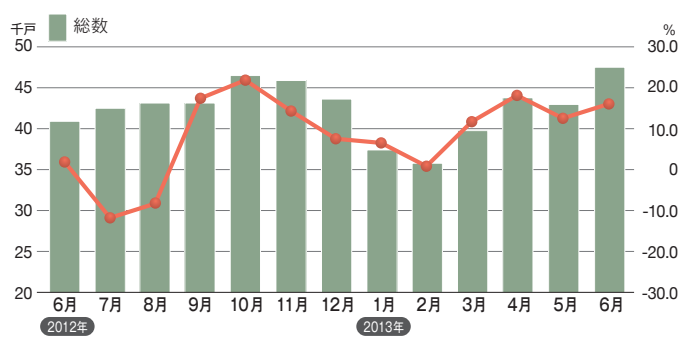
2013年6月の新設住宅着工戸数 △は減

		6月					5月	4月	3月
		対前月比 (%)		対前年同月比 (%)					
新設住宅計		83,704	3,953	5.0	11,138	15.3	79,751	77,894	71,456
建築主別	公共	1,854	△347	△15.8	△553	△23.0	2,201	2,172	1,831
	民間	81,850	4,300	5.5	11,691	16.7	77,550	75,722	69,625
利用関係別	持家	30,699	1,797	6.2	3,728	13.8	28,902	28,357	24,879
	貸家	30,504	3,890	14.6	3,528	13.1	26,614	27,842	25,986
	給与住宅	472	148	45.7	△423	△47.3	324	307	407
	分譲住宅	22,029	△1,882	△7.9	4,305	24.3	23,911	21,388	20,184
	うちマンション	10,274	△2,619	△20.3	3,238	46.0	12,893	10,718	9,576
	うち戸建	11,651	770	7.1	1,004	9.4	10,881	10,559	10,495
資金別	民間資金	73,784	3,490	5.0	11,437	18.3	70,294	68,227	61,918
	公的資金	9,920	463	4.9	△299	△2.9	9,457	9,667	9,538
	公営住宅	1,395	△701	△33.4	△789	△36.1	2,096	1,881	1,684
	住宅金融支援機構住宅	4,381	538	14.0	△227	△4.9	3,843	3,992	4,432
	都市再生機構住宅	363	316	672.3	363	-	47	4	80
	その他住宅	3,781	310	8.9	354	10.3	3,471	3,790	3,342
構造別	木造	47,474	4,474	10.4	6,562	16.0	43,000	43,761	39,637
	非木造	36,230	△521	△1.4	4,576	14.5	36,751	34,133	31,819
	鉄骨鉄筋コンクリート造	234	△43	△15.5	△96	△29.1	277	325	390
	鉄筋コンクリート造	21,737	△2,170	△9.1	3,073	16.5	23,907	21,920	20,326
	鉄骨造	14,097	1,667	13.4	1,642	13.2	12,430	11,747	10,944
	コンクリートブロック造	84	21	33.3	△34	△28.8	63	92	74
	その他	78	4	5.4	△9	△10.3	74	49	85

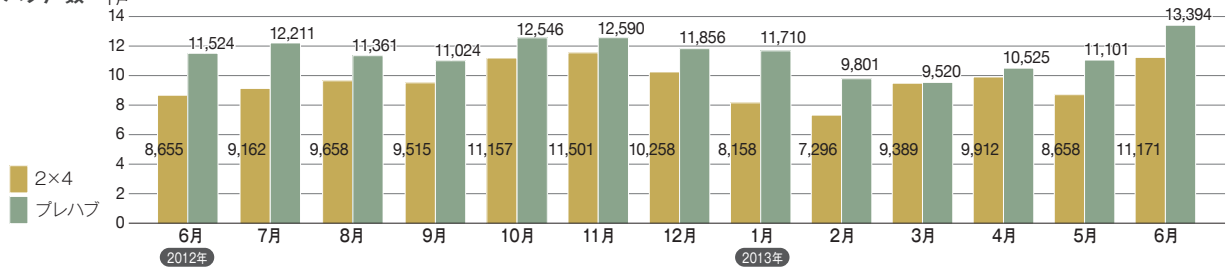
利用関係別戸数



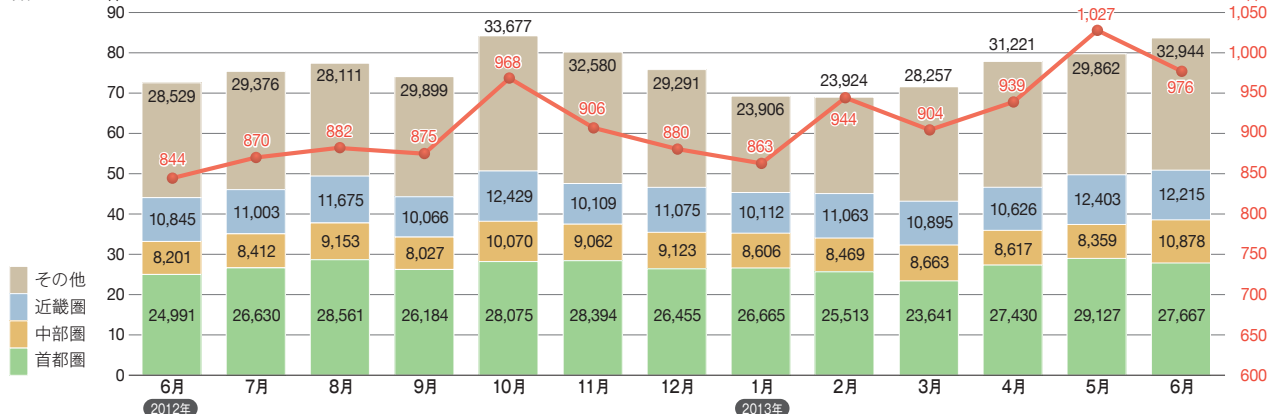
木造戸数



2×4、プレハブ戸数



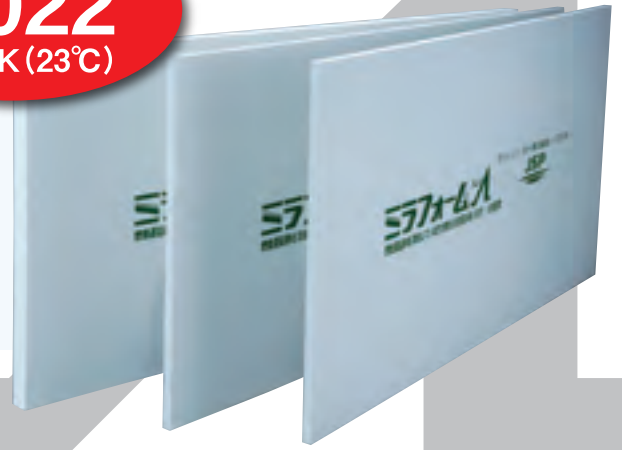
都市圏別戸数



熱伝導率

0.022
W/m·K (23°C)

- 熱伝導率0.022W/m·Kを実現。吸水性が低く安定した性能を発揮。
- ノンフロン・ノンホルムアルデヒド・4VOC基準に適合。
- ミラフォーム同様 曲げ強度(靱性)に高い性能を発揮。



必要なだけの「断熱材」をプレカットしてお届け

対応製品 ミラフォーム[®] & ミラフォーム[®]ラムダ

大引間割付断熱工法

ムダなく
スッキリ施工!!

お客さまはプレカット図面をご用意していただくだけ!!

JSPへ

専用ソフトで
割付図面を作成。

承認・発注後、
断裁加工をします。

お客さまへ

ご指定場所へ納入。

- カット作業が不要!!
- 端材が出ないので産廃費用削減!!
- ケース・坪単位購入ではないので余りがなく費用削減に!!
- 施工時間の短縮が図れます!!
- 施工工程の簡略化で人件費を削減!!



株式会社 JSP 第一事業本部 建築土木資材事業部

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-2(新日石ビル) TEL 03-6212-6363 FAX 03-6212-6369

ホームページ <http://www.co-jsp.co.jp>